

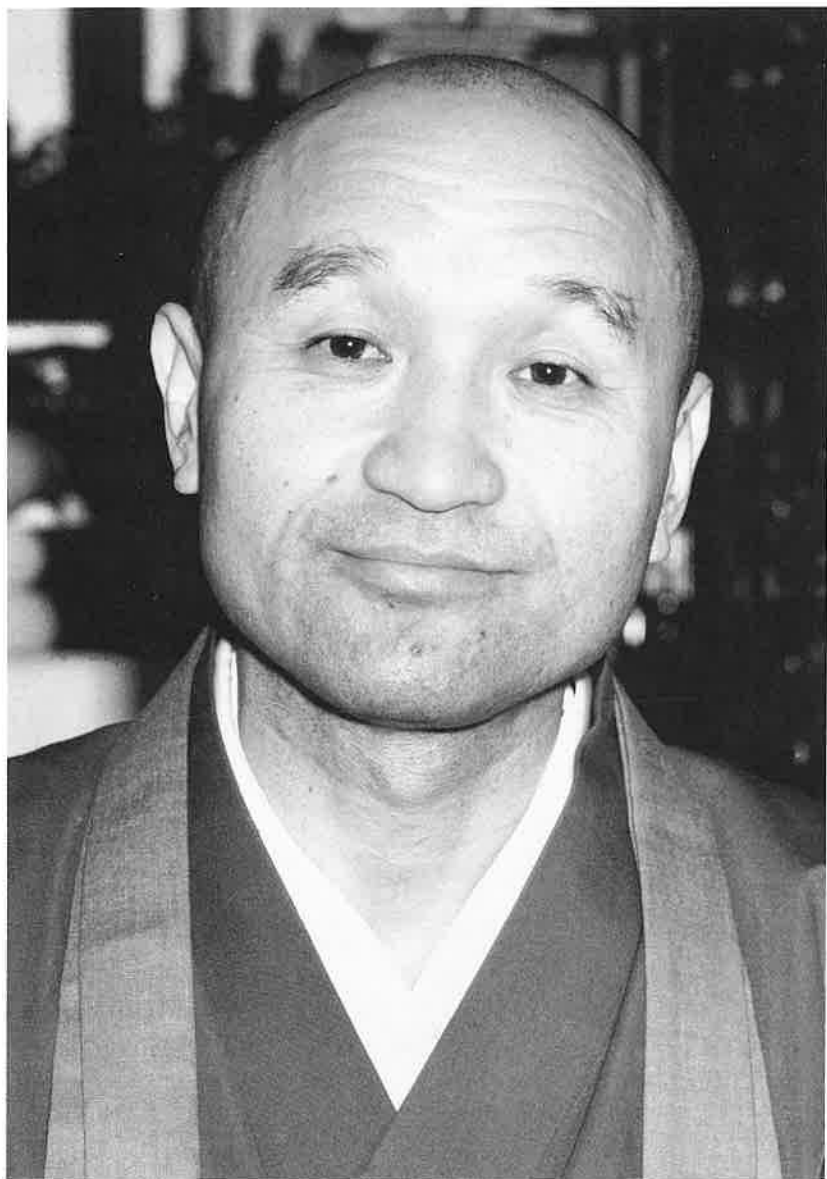
森 秀

SEIJU

特別号



横浜 善光寺刊



講演……善光寺住職 黒田武志（大圓）

黒田大圓(武志)のプロフィール

駒沢大学大学院卒業

大本山総持寺、永平寺安居

日本一周行脚

タイ・ワットパフナムにて修行、インド仏跡巡拝

アメリカ禅センターに開教師として勤務

善光寺住職、現在にいたる

トーヨー株式会社・新社屋完成一周年記念講演

演題

精一杯生きる

禅ということとは、昨日の新聞でも大きくとりあげられておりましたが、今世界中で関心を持たれています。何故そうした関心が持たれているかをいつまんで申し上げたいと思います。

まず人間がどうしても行かなくてはいけないところはどこだろうか？、ということから話してみましよう。もう二千五百年も昔、インドにお釈迦様がお生まれになった。インドという国は、私も幾度か訪ねておるのですが、とにかく暑いし暑いし貧しすぎるのです。しかしお釈迦様はシャカ族の王子としてお生まれになったわけで、こういったこととは関係ない優雅な生活を送っておったわけです。

四苦八苦

ある日、若きお釈迦様、(シッタールダ)が、何人もの召使いをつれて狩りに行ったところ

が、今まで、見たことのない人間に出会ったという。顔はしわだらけで、見るもあわれな様子をしている。「あれは何だ」、と問うと、召使が、「あれは老人と言つて、人は年をとるとみなあのようになるのです」と答えた。そして次の日もまた狩りにゆくと、木の下に寝ている者がある。「あれは何か」とたずねれば、「あれは病人というのです」、と召使が答えた。三日のうちにゆくと、その木の下の老人はもう動かないではないか。「あれは死人というて、人はみな最後にはあのようになるのです」と召使はお釈迦様に申し上げたという。そこでお釈迦様はどうしてあのようなことになるのかということについてお考えになり、いろいろと御修行なさつて、ついに気がついたことは、人間は生まれ、病にかり、年老いて死に至る。だが、それだけではない。人間生きているうちは、四苦八苦といつてどうしてもとり除くことができない苦しみが

ある。それにお釈迦様はたと気がつかれたのです。そこに仏様の教えがあるのです。とにかく一生のうちに一度は死を受け入れなくてはならないのです。だから、命のある限り一生懸命に生きることなんだ、ということがお釈迦様の教えなのです。

今月、二月十五日にお釈迦様が亡くなられたわけですが、クシナガラというところ、何もございせんが、ただ土でつくられたドームが残っており、茶毘にしたところでありませう。お釈迦様が八十を過ぎてなぜそこへ行かれたかと言うと、そこが故郷であるから、自分の生まれた近所であるから、そこで死にたいということなのです。杖をつきながら、あちこちで教えを説きつつ、その地へ向かうわけです。故郷へ向かう釈尊のお徳をたたえようとする村人が食事をごちそうしたところがそれが毒キノコであったとかいのですが、それでお腹を悪くして亡く

なられた。その最後の言葉が、「おこたらずにつとめよ。」というのであります。我々は四苦八苦の中でいいことなんかあるわけがないと生きておるんですが、しかしそうではなしに、これが最も大切な事ではないかと思ひます。

建長寺の管長様

鎌倉に建長寺というお寺があります。四代前の管長様は群馬のご出身で、非常に貧乏に貧乏をし、家は農家でお前は食べさせられないから、寺にでもはいつて修行しろというわけで、お小僧さんとして寺にはいつたわけです。ところが僧もそう裕福でない。農家に行つてお経をあげて、米や野菜をもらうとか、そういうふうにして暮らしておつたわけです。ところがある時、御住職が行けないのでお前が行つて用を足して来い、というので農家に行つたところが誰もい



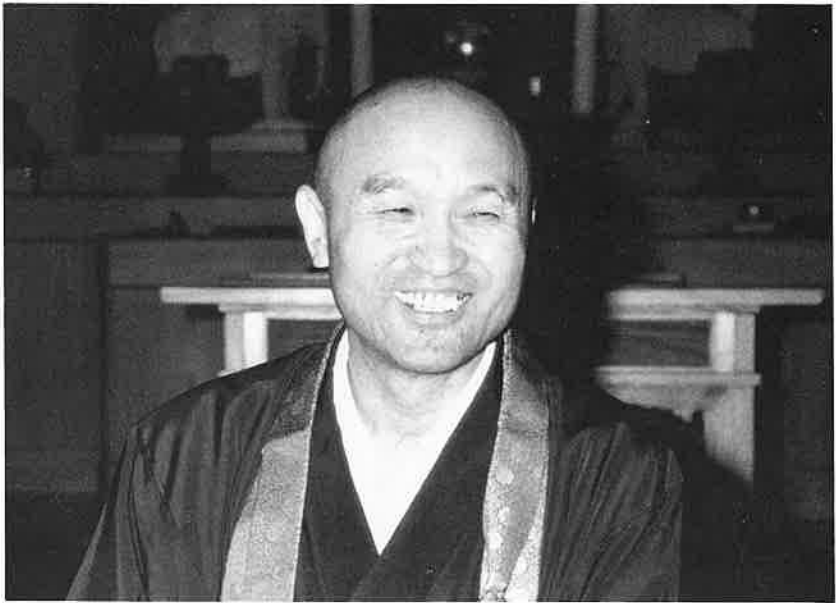
ない。まだ十三歳でしたから、途方にくれて、しょんぼりと土間にすわっておった。すると奥から、まだ三、四才の子供が起き出してきて、おひつからごはんをつまみ出して食べたあと、おへらに小便をジャーとひっかけてしまった。ご飯を盛るものに小便なぞひっかけて、いやだなあと思っていると、昼時になって家の人たちが帰ってきた。小僧さんが待っているのを見て、こんなに長いこと待たせて悪いことをしたと言ってお母さんが、さっき小便をかけられたおへらでご飯を盛って食べてゆけという。でもそんな汚ないものは食べられないと思うて遠慮して早々に戻ってきた。ところが四、五日ほどたつと、またその家にお使いにやられた。するとそのお母さんが、このあいだは長く待たせたのに何も御馳走してやらなくて大変悪かった、と行って甘酒を出してくれた。それがおいしかったもので、小僧さんは一杯が二杯になり、三杯

になり、ごちそうになってしまった。たいへんおいしい甘酒でした、というと、そこのお母さんは、これは今度また小僧さんが来るというので、このあいだのおわびにと、自分の食べる飯を減らしてつくっておいたのですよ、と言う。

それではこの甘酒は、あの小便ひっかけたへらでよそったご飯でつくったのか、やれえらいものを飲んでしまったと、ほうほうのていで帰ってきたというのですが、頂戴しなくてはならんものは、頂戴しなくてはならんのです。自分にとって都合の良いことばかりを選んでも、受けるべきものは受けなくてはならない。そこに仏様の教えがある。

私は六男坊——

私は寺の息子で、男七人ですが、八人いた。長男はバナナの食べすぎで四才の時に死んでし



まったというのですが、私は知りません。そのあと七人兄弟で、寺は非常に貧しかった。親父のお経の手伝いをするときに、足袋がみな穴があいてる。仕方がないので穴のあいた足袋にだぶだぶの衣を着て出るというような生活をしておったわけです。

六男坊である私も、進路を決めなくてはならなくなつたとき、アメリカで仕事をして今では三十年になる兄がおるのですが、坊さんになるなら、アメリカで少し勉強したらどうだろうかと思ひ、駒沢の大学院を出てアメリカに行こうとしたら、それぐらいで人が救えるか、修行しろ、というんで総持寺へゆきました。総持寺で半年ほど修行してアメリカへゆこうとしましたら、今度は半年や一年の修行では下の下だ、というので修行のやり直しをするために、また総持寺や永平寺へと行きました。その修行で何をやるかというと、朝の二時か三時に起きて、皆

の修行ができるように清掃をしたり、ご飯が食べられるように準備したりするのですから忙がしいのです。しかし雑巾がけをしたり食事の準備をしたりということばかりのくり返しです。

「出逢つたヤクザ」

そんな時、私はバラック建ての寺に住んでいたのですが、あるお彼岸の終わる時の夕方ガラガラつと音がするので見ると、年の頃三十五、三十六の男の人が立っている。どうしたんだ、と聞くと、「私は殺される！」というんですね。そこでまあすわりなさいと言つてすわらせてどうして殺されるんだと聞くと、ぱつと手を出して見せるんですが、まっ白に傷があるんです。そして言うには、「私はヤクザだ。ゆうべとりたてに行つてきた」とこういうわけです。仲間とトラックでとりたてに行つたけれどお金がない



から、家財道具を運び出し、子供が見ているテレビを最後にのせようとした。するとお母さんと子供が、「あんたらは狼だ、鬼だ」というたというんです。私は三十五、六になってこれほど言われるまで悪いことはしたくないから改心をした。しかしつかまつたら殺されるから助けてほしい、とこういうわけなんです。その当時私は二十六才ほどでありましたので、考えたところ、やっぱり一番よいのは警察にゆくことだと言うと、今まで警察にはさんざんお世話になっていいるから、警察には行きたくない、殺されてもいいから何とか逃げたいというんです。そこで私も困りまして、いろいろ問答をしたんですが、もし殺されてもいいんなら、この命私にくれるか、というと「あげます。今ここでナイフをくれたら腹を切ってもいい。」というのです。しかし腹を切られても困るのでどうしたいんだというと、遠いところへ逃げたいというん

です。北海道へ逃げる、とまあそのころは二十年前ですし、北海道は今よりは遠いところだったかも知れませんが、それなら私も力をかそう。殺されてもいいというのなら、何か思い残すことはないのか、と聞くと、ない、というんですね。両親はいるのか、と聞くと名古屋にいます。そこで私は、先祖に今日までのお礼の供養をしようと思い、住所と名前を書いてくれ、と言って半紙と筆を渡しました。その男は筆を握ってじつと半紙を見つめていましたが、おもむろに住所を書きはじめました。これから死を迎える人間はこういうものかと思つて見ておりました。そしてもう一度警察に行かないか、と言つてみたところ「どうしても行かない」といふんで仕方がないから手持ちの金三万四千円のうち、三万円を男にやりました。それとアメリカの兄貴が送ってくれた背広や、自分の学生時代の時着たコート、それに仏様に供えてあつた

お菓子やらなにやらみんなさげてやった。そして北海道に着いたら、無事着いたという一言でいいから連絡をくれと言つて見送つたのであります。もう日はとつぷりと暮れ、その男靴をはくやいなやさつと走り出して逃げていった。その後、三日経ち、一週経ち、一ヶ月、三ヶ月経つても何の連絡もない。これはえらいことをしたと思つておつたのですが、そのうちにまた縁があつて永平寺にお世話になりました。ところが私のようにかたちの決まった者にとつては永平寺というところは大変居づらいところでありまして、こんなところに居ても仕方がないといふんで、後輩から千円のお金を借りて永平寺を逃げて出たんであります。ところが千円じゃとても東京へ帰れません。福井の市内を托鉢してその金で東京へ帰ろうと思ひ、ようやくお金をためて汽車に乗ろうとして駅へ行くと、もう発車のベルが鳴っている。福井というところは



お坊さんを大事にしてくれるところで、切符を買わないでもいいか、というところ、さあどうぞと言うのでとび乗った。ところがその列車はなんと直江津行きで、東京行きは、同じ時刻に、別のホームから出ていたんであります。まああわてものいうのはこんなものであります。何でも乗ればいいと思っていましたからね。そこで私は富山で降りて、知り合いといっても寺の名前だけを頼りに探しあてたのですが、そこを夜遅く訪ねてやっと起して泊めてもらいました。そして次の日に三千円借りて東京へ戻ろうとしたのですが、その友人に、「せっかく来たんだから托鉢して帰れ、」と言われて一日のつもりが、その托鉢が日本一周したのであります。雨が降ろうが雪が降ろうが、托鉢して回ったのです。托鉢するには、まずお寺に泊めてもらうのですがお風呂をわかしたり草をむしったりしてお手伝いをして、次の日に午前中托鉢をして回る

わけです。ある時京都で雨降りが三日も続いた時がありました、わらじはもう雨でぐちゃぐちゃになるし体中は臭くなるし、どこかに泊まるところはないかと思つても、目あての寺では来客があるので泊めてもらえず、仕方なく旅館に素泊まりして銭湯に行きました。ところが次の日も雨はやまない。そこで金もなくなつてしまつてどうしようもなくなつていたところ、はたと思いついた。そうだ、私は坊さんだ。坊さんのできることといえば、お経を読むことです。から、主人のところへ行つてお経をあげさせてもらいました。声の限りに読経をした後、主人が、「雲水さん、お腹がすいていないかい」と言うので、久しぶりにまともな食事にありつけたわけです。そこで力がついて雨の中に托鉢に出かけました。声をはりあげて羯諦羯諦とお経を唱えてゆくとちょうど女学生たちが学校が終わつて出て来た。ここぞとばかりに声をいっそう

高くして唱えると、女学生たちが五円、十円と布施してくれてみるみるうちに応量器一杯になつたのです。そしてちようどその時、雨が上がつて太陽の光がさしてきたんです。私は思いましたね、信仰というのはすばらしい、また、私は女学生たちによつて生かされているんだ、と。『人間決して死ぬことはないんだ』、そう思いましたが、そうして日本全国を托鉢して回つたわけですが、いつも私の心の中には、北海道に逃げたヤクザのことがあつたのです。ついに名古屋まで来た時に、ヤクザの両親が名古屋にいたことを思い出して住居を探そうと交番で問い合わせたところ、若いおまわりさんが一生懸命捜してくれるがなかなか見つからない。二十分もたつてからおまわりさんがいうには、「この住所は、ありません」と、こうです。その時私ははたと気がついた。そうか、サギだつたんだ。その時は全身の力が抜け、宇宙がどつしりと重い

気がしましたね。途方にくれて、金もないのでどうしようかと思っていると、兄の知り合いの人が、偶然通りかかって、アメリカから帰ってきた兄が、もし私に会うようなことがあったらぜひ家へ寄るようにと伝えてくれと言うんで、私もそれではと、ぼろぼろの着物を着替えて十年ぶりに兄に会いました。その時私は、兄弟が6人いるところで、「私はありとあらゆることをしてきた」とホラを吹いたんです。そこで長男が言うには、「そうかお前そんないろいろなと得てきたのなら、出してみろ。」と言うんです。私は困りましたね。出してみろと言われても何も出すものがない。そこで私はいかに修行が未熟かということを改めて思い知ったわけです。そうか、それは修行が足りないんだ、と思いついて総持寺に三年いて修行をし、のちにインド、タイへ行って修行をしたわけです。なんで二二七の戒律を守ることがあるんだ、というんで、



黄色の腰巻きだけを身につけた素っ裸の格好で修行をしました。タイの仏教には二二七の戒律があり、日本仏教には十六の戒律があります。世界共通の戒律はですね、第一に不殺生といって、決して殺しをしない。第二に不偷盜戒、第三に不邪淫戒、第四不妄語戒といってうそを言わない、第五不酤酒戒といってお酒を飲まない、というもので、どの宗教にも共通しているんです。ところがタイの二二七の戒律は、高いところ座らないとか、観劇をしないとかがさういった細かい戒律で二二七あるんです。それに対して日本の仏教ではその五つのほかに、第六不説過戒かといって人様の過ちを言わない、第七不自讃毀他戒た、自分のことばかり考えない、第八不慳法財戒たといって志を正しくして仏法僧の三宝にかなうようにする。仏法僧というのは仏様と、仏様の教えと、それを教える人のことで、その三宝を大事にしていこう、というもので、いい

ことをして悪いことをしない、とこういったもので十六あるんです。ところがタイの二二七は、金に迷わない、腹いっぱい食べない、異性に迷わない、とこの三つのが宗教の基本であると体験からわかりました。そうしてタイから戻って来まして、どうしても知るならアメリカだ、というのでアメリカへ渡りまして、現在は横浜の港南区というところで寺を新しく建立して生活しております。

道元禪師様

道元禪師様というのは曹洞宗の開祖であります。世界哲学者・思想家の中でも一番ではないかとも言われております。道元禪師は三才の時にお父さんを亡くし、八才でお母さんを亡くしております。そしてどうしたかという、十三才で出家して得度します。比叡山で勉強を

しますが、ある時経文にですね、『顯密二経共に
淡ず。本来本ほん法ぽう性じやう天然てんぜん自じ性じやう身しん。若しかくの如く
ならば三世の諸仏何をもってかさに発心して菩
提を求るや』という有名な言葉があります。簡
単に申しますと、人間は生まれながらにしてみ
な仏様だ。ところがなぜ修行しないと本当の仏
様になれないんだというので、一生けんめい修
行しましてね、中国に渡って修行をして悟られ
るんですね。その悟られた時、禪堂で坐禅をし



ておった。ところがとなりにならないうわっていた坊さ
んがこっくりこっくり居眠りをしておる。天童
如浄という大変すばらしいお坊さんはこの寝て
いる坊さんのところへ行つてスリッパをぬいで
パーンとたたいたというんですね。身心しんじん脱落、
脱落しんじん身心しんじんというて、わざわざ修行に來ているの
なら本気で修行しろ、身と心からいらぬものを
をとり除けというわけです。人間の欲は五欲と
いいまして財欲、おいしいものを食べたい、偉

くもなりたい、美人に会いたい、楽もしたい、この五欲で本当のものがみんな濁ってしまわうわけです。「幼な子がしだいしだいに知恵づきで、仏に遠くなるぞ悲しき」と言いますが、本当でしょう。母親から出てくる子供は何ひとつ邪心がないのです。そこを道元禪師は気がつかれた。

心と体がひとつに

さきほども言いましたが、人間最後はみな仏の世界へ行く。だが、あそこで焼くのは体だけなんです。心というのは、大きな池に石をぽーんと投げたら波紋が立ちます。波紋は消えてしまいますが、あそここの池には昔子供が落ちて死んだから埋めようといつて埋め、まだ思いが残るから木を植えよう、もつとすばらしいものを建てよう、と波紋は立って、その実は消えない



んです。心はつかむことも切ることもできない。その心と体がひとつになったのが人間なのです。

きうん 希運禪師という方

きうん
希運禪師という方がおりまして、一人息子なものでですからお母さんは、「勉強しろ、しかしそれだけではなく人のためになることをしろ」と

いうんでお坊さんにした。しかしその息子の身を思いつづけ、修行の間中思いつづけたもので目が見えなくなってしまった。しかし息子に会いたいという気持ちはいつそう強まりとうとう家に、「修行している坊さんはどうぞ泊まって下さい」と看板を出した。そうして泊まる雲水の足をお母さんは清めたんですね。希運きうんという坊さんは二十年の修行をして、ほうぼうを歩きまわり、自分の家の前に来ると看板が出ています。



家の中を見ると目の見えないお母さんがしょんぼりとすわっている。ところがその時に迷うんですね。もうすこして悟りの境地に達する、今母親に会ってはそれがくじけてしまう、そう思つて、足を清める時に、こぶのある左足を洗つてもらつては自分の正体がわかつてしまうと思ひ、右足を二度洗つてもらひ、一夜の宿をとり翌朝出達するわけです。ところが希運禪師が渡し船で渡ろうというときに、近所の人からそれは息子だと聞かされた母親が杖をついておいかけてきて、川に足をすべらせておちてしまうんです。そこで希運禪師はあわてて引き返して探すのですが、夜通し、夜明けまで探しても見つからない。その時に希運禪師がどう言つたかという、「一子出家すれば九族天に生ず」ともし然らざれば諸仏は妄語をなす」と言つて修行するあまり母親を殺してしまつた。そこで修行をやめようとしてたいまつを水の中に投げ入れ

た。まさにその時、お母さんは昇天したということです。心はこれなんです。戦後四十数年、日本は世界のトップに躍り出た。たしかに技術面ではすばらしいものがあります。しかし、私が、タイ・アメリカその他諸国で生活したつたない経験を通してさえも、こうした日本の現状は、決して正しいといえるものではないと思ひます。子供も体ばかり大きくなつて、頭がついていかない、知恵がない。人間は智慧と体と心、全体がひとつでなければならぬと思うのです。

このビルが完成した時、私も外から見ておりました。どえらいものが横浜に建つたと思つて車の中から拝見したのですが、私がお縁をちようだいしてここで話をさせていたたくとは夢にも思ひませんでした。

シュヴァイツァー

道元禪師の言葉にありますけれど、「この法は人々の分上に豊かに具われりといえども、いまだ修せざるにはあらわれず、証せざるには得ることなし」、もう日本一のビルの中にいる皆さんが切磋琢磨して磨くだけだ。有名な医者であり、牧師であり宗教学者であったシュヴァイツァーがなんと言ったかというところ、「このアフリカの財産は今私かと思うようにしているけれど、これは私が授かったものだ。私が世界的にある地位は私が借りているだけだ。次の人にちゃんとわたすんだ」こう言っているんですね。これはまさに、キリスト教の枠を越えた、仏の心だ。トーヨコを、日本一にして、次の世代に渡すということとで本日の私のスピーチをおわらせていただくわけでありませう。最後に道元禪師が何を言っ

たかというところ、「直下に眼横鼻直なることを認得して人に謾せられず、空手にして郷に還る」といったというんです。これは、お前の目は横についているじゃないか、鼻は縦についているじゃないか、つまりあたりまえのことをあたりまえに認識することなのです、ということに、私は強い共感を覚えるのであります。人間万事塞翁が馬、と私はよく言うんですが、人生よしあしではない、トーヨコにいたら、よしあしでなしにトーヨコをよくすることだ。やるなら命がけでやれ、と申し上げて、今日の話を終らせていただきます。

